

昭和 SPレコードで迎れば

政見レコード^{（その四）} 犬養毅と若槻禮次郎

SPレコード収集家■城内 實

(一)

「況や六十年間続いて、惰力に惰力で、重つたといふこの弊害を叩き破つて新たな仕事を始める」というのは、少なくとも四年はどうしてもかかる訳である。それ故に我々は全国民に訴えて、この日本の大勢、總てのものの衰えているといふこの老朽した日本に活氣を与えるといふがためには、諸君は大奮發をして、我々に援助せられる事を求めるのである。」

「總てひつくるめて言えども行政、財政の根本的立直しを行わねばならん、これが政府の側である。ひとり政府の側ばかりではない。民間全体の總てのものに向かって、大革新、大革正を行わなくてはならんといふ時機が到達しているんだある。」

これは、ある首相が選挙直前にレコードに吹き込んだ政見である。「聖域なき改革の断行」を唱えている小泉首相の主張と妙に符合するところがあるが、「六十年間続けられた惰力」の「六十年間」とは、先の大戦から現在までの約六十年間ではなく、明治維新からの六十年間を意味する。

(二)

レコードの声の主は犬養毅である。先日骨董市で、大変幸運なことに、犬養の他に若槻禮次郎の演説レコードも手に入れることが出来た。

犬養毅首相（政友会総裁）と若槻禮次郎民政党総裁（前首相）のレコードは、昭和七年一月二十一の帝国議会解散とそれに伴う二月二十日の衆議院議員

選挙に向けての選挙演説を吹き込んだものである。日本コロムビアからは、この犬養、若槻の他に、井上準之助民政党総務、永井柳太郎同党幹事長のレコードも発売されたことは既に本連載第六回目に述べたとおりである。

(三)

一月三十一日付けの国民新聞によると、三十日午後三時半、犬養首相は官邸で濃茶の羽織袴と羽二重の縫紋という粋な出で立ちで、原稿なしで手を振りながらはつきりとした口調で国難打開に関する政府の所見を述べた。また、レコードを両面に吹き込んだその終わりにうつかり「もう宜しいか」と言つてしまふ。

特に満州の問題の解決については、中国通であつた犬養は熱のこもつた演説をしている。「我々の主張を大別して、極く簡単にこれをひつくるめて言えば、応急の問題と、根本の問題との二つに分れる。応急の問題は何であるかと言えば、外に對しては満州の事變を如何に解決するかと、こういうことが一つ。（中略）それから根本の問題としては、外に於ては隣国支那に対して全体の國際關係を如

犬養は、以前にもレコードへの吹き込みを薦められたことがある。実際、後藤新平は大正十五年十月三十日に日蓄に「政治の倫理化」を吹き込んでいる。

(四)

の吹き込みを薦められたことがあつたが、「そんなことは新派の後藤（新平）にやらせた方が気が利いているだろう」と言つて断つてしまつたことがある。

何に改善するかと、この根本が定まらなければ僅に満州の問題が治るんではない。それ故にこの根本をどうするかということについては、我々は多年の研究と抱負を持っているのである。これを行いたい。」

この発言から、犬養が満州国建設については、隣国中国に対する配慮から、むしろ反対の立場であつたことがうかがえる。

満州事変の解決のため、女婿の芳澤謙吉を外相に抜擢したのもその意欲の現れであろう。

(五)

大正末期の護憲三派内閣の領袖と言えば、憲政会の加藤高明、政友会の高橋是清、革新俱楽部の犬養毅の三名であるが、若槻禮次郎は、この加藤高明内閣の内務大臣として、普選法・治安維持法を成立させた手腕を評価され、加藤の後を襲つて首相に就任した人物である（第一次若槻内閣）。

若槻の方は満州の問題について

でレコードの中で次のように述べている。

「満州事件費は、帝国議会の協賛を必要とします。本事件費の如きは朝野両党一致協賛し、忠勇義烈なる我が國軍に対する帝國議会の信頼と、国民の熱誠とを表明すべきであります。政府はこれをも回避したことには、国民及び議会を無視するもまた甚だしいと言わねばなりません。」

野党になつた民政党的若槻は事変拡大をむしろ支持している國民世論に迎合しているかのような発言をしている。そもそも犬養内閣の前の第二次若槻内閣では、前年九月二十一日の朝鮮軍出兵に幣原外相、井上藏相が強く反対したにもかかわらず、若槻は事変拡大を追認するばかりであった。

その後内務大臣の安達謙蔵が政友会との協力によつて軍を押さえようとしたが、民政党的井上財政と政友会の高橋財政という真っ向から異なる財政政策の両党が協力する構想はあまりに

も非現実的であった。

(六)

犬養内閣の衆議院解散について若槻は、「苟も解散を奏請するならば、先ず政府の所見を述べ、しかる後反対党に論議を尽くさしむるのが当然であります。（中略）要するに犬養内閣は、貴衆両院における、反対党の正義党論耐え得ずして、これを封鎖し、もつて国民の耳目を蔽うの暴挙に出でたるものと非難されても、弁解の辞はあるまいと存じます。」と述べて犬養を非難している。それでも犬養の政友会の方は「不景気の民政党か

結果は政友会三〇三議席、民政党一四四議席で、政友会の圧勝であった。

(七)

政見レコードの吹き込みから三ヶ月余りして犬養は青年将校の凶弾に斃れた。したがつて、このレコードは犬養の最初で最後のレコードとなつた。

歴史に「i f」は禁物であるが、もし犬養が暗殺されず、彼の政見レコードの内容通りに、旧態依然とした行政機構と産業構造を大改革し、軍部を押さえることが出来たならば、その後の日本の歴史は変わつていったかもしれない。



（続く）